

古代集落と製塩土器 — 掘立柱建物との関係 —

● 永井邦仁

愛知県の沿岸部では古墳時代から平安時代にかけて土器を使った製塩が盛んに行われた。そこで堅塩を生産するために用意された製塩土器（焼塩土器）は、河川をゆく舟運によって内陸部へと流通し、その量は知多式4類の段階である7・8世紀に急増することが、古代集落遺跡の発掘調査によって明らかにされている。本稿では、各遺跡における製塩土器の出土状況について検討し、その密度から遺跡を分類する視点を示し、その使用から廃棄に集落内の大型建物群に居住する上位階層が関わっていることを確認した。加えて、8世紀代の掘立柱建物造営に関して、堅塩や製塩土器が儀礼行為に用いられた可能性を示した。

1. 製塩土器とその出土分布をめぐって

愛知県の沿岸部、伊勢湾や三河湾に面する知多半島や渥美半島などの海浜には、古墳時代から平安時代にかけて土器を用いた製塩を行った海浜集落遺跡（製塩遺跡）が多数所在する。そこで作られた塩は、にがり成分などが含まれる粗塩とそこからさらに焼き固めた堅塩に大別される。当該地域で製塩に用いた土器のうち、碗形の杯部に筒状・棒状の脚部が付く特殊な器形の土器を知多式（渥美式）製塩土器と呼んでいるが、研究の進展によって、これらは堅塩を生産する焼塩工程に用いられたものと考えられている。

文献史料や平城京跡出土の荷札木簡によれば、奈良・平安時代には尾張国知多郡を通じて都へ調として納められるほどの地域の特産物の一つであったことが知られている。その一方で、沿岸部から離れた内陸部の集落遺跡の発掘調査においても製塩土器の出土が相次ぎ、地元でも土器に収まった状態の堅塩が流通していたことが指摘されてきた（森 1997）。近年では、7世紀後半～8世紀の型式である知多式4類の段階が圧倒的に多く確認され、加えて規模が大きく継続性の高い階層的に上位の集落遺跡や官衙関連遺跡に集中する傾向が指摘されている（森 2009）。

そこで筆者は、このように偏った流通の様相がうかがえる背景には、製塩土器によってもた

らされた塩の用途を考察する必要があると考えた。自身も発掘調査に携わった水入遺跡（豊田市渡刈町）では、製塩土器がまとまって出土す

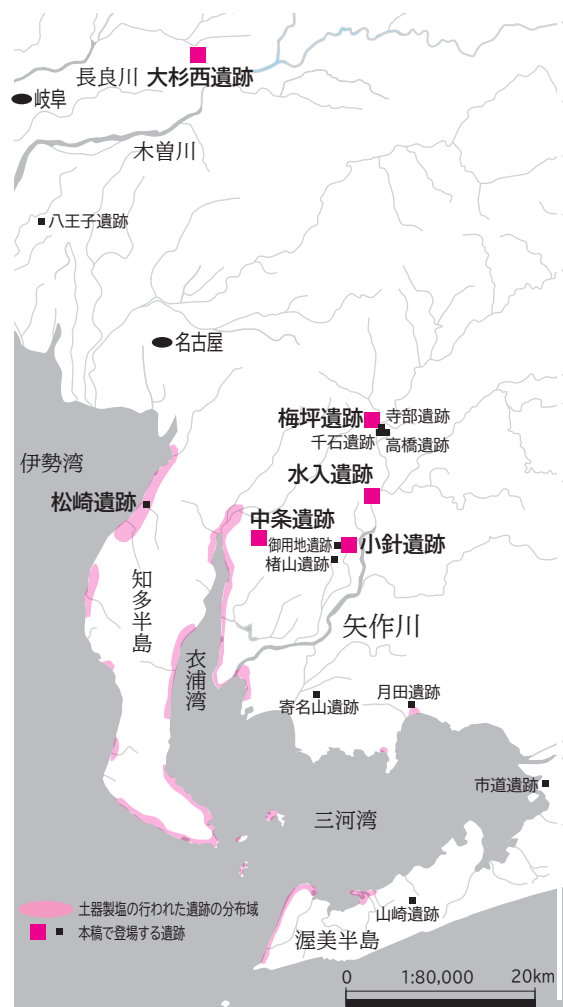


図1 遺跡所在地

る竪穴建物跡が確認されており、比較的出土点数の多い遺跡の1つに計上されている。しかしながらそれは廃棄状態であって製塩土器や塩の使用状況そのものではなかった。その発掘調査報告書では、出土点数をグリッド単位で表示することで責めを果たしたことになるが（愛知県埋蔵文化財センター 2005）、遺構との関係が表示されていない図であり中途半端な点是否めない。

ところが令和3年（2021）の秋に岐阜県関市で開催された『R3 関市発掘調査展 いにしえの関 集落遺跡7選』（関市わかくさ・プラザ学習情報館特別陳列室）において、大杉西遺跡（関市大杉）で発掘された掘立柱建物跡の2基の柱穴から知多式製塩土器の脚部が1点ずつ出土していることを知った。当該遺跡は知多半島や伊勢湾からはるかに内陸であり、多量の製塩土器が出土しているわけではなく、単なる混入とは言いがたいものを感じた。これを受けて西三河地域の古代集落遺跡における製塩土器の出土状況を再検討した結果を述べたい。

2. 製塩土器の出土密度と遺跡の性格

製塩土器はその特殊な器形ゆえに集落遺跡の発掘調査で出土する土器のなかでも識別は容易であり、かつ1個体に1つしかない脚部からおおよその点数（個体数）を把握することができる。この特徴を活かして遺跡ごとの出土点数を比較する研究がなされてきた（森 2009）。もちろん脚部だけでなくきわめて薄く作られた杯部の破片も抽出する必要がある。また、発掘調査面積が広ければ点数が多くなることも想定される。前者については整理作業における土器片の選別の際に注意深く進めることが必要であるが、被熱による赤変や極端な薄さに気づけば可能である。そして後者については、単純に調査面積で割って密度を算出してみた（表1）。

製塩土器の点数は、森泰通氏が集計したもの（森 2009）やその後の発掘調査報告書で提示されたものに基づく。これと比較するため、製塩遺跡の例として平成20・24年度に行われた松

表1 遺跡における製塩土器の出土点数とその密度（森 2009 をもとに作成）

旧国名	自治体	遺跡名	点数	調査面積(m ²)	時期	密度	分類
尾張国	一宮市	八王子遺跡	1000以上	23740	7世紀末～8世紀前葉	0.0421	B
	東海市	松崎遺跡(平成20・24)	24372	8300	7世紀～9世紀	2.9363	S
三河国	豊田市	梅坪遺跡	234	22339	7世紀～9世紀	0.0104	B
		寺部遺跡	4	51960	8世紀～9世紀	0.0001	C
		千石遺跡	30	2100	8世紀～9世紀	0.0143	B
		高橋遺跡	18	53000	7世紀～8世紀	0.0003	C
		水入遺跡	72	68050	7世紀～9世紀	0.0011	C
	刈谷市	中条遺跡	3852	17394	7世紀後半～9世紀	0.2214	A
	岡崎市	小針遺跡	141	18100	7世紀中葉～8世紀	0.0077	C
		楮山遺跡	53	5000	8世紀	0.0100	B
	安城市	御用地遺跡	62	11700	7世紀後半～8世紀	0.0052	C
	西尾市	寄名山遺跡	66	1558	8世紀後葉～11世紀	0.4236	A
	蒲郡市	月田遺跡	117	250	7世紀後半～9世紀	0.4680	A
	豊橋市	市道遺跡	16+18	69962	8世紀～9世紀	0.0005	C
	田原市	山崎遺跡	約100	約1600	7世紀～8世紀	0.0625	B

表2 松崎遺跡（平成20・24年度の発掘調査）における製塩土器の出土点数

	知多1類	知多2類	知多3類	知多4類	知多5類	総計
08Aa区	1462	148	398	3425	90	5523
08Ab区	690	15	114	12256	376	13451
08B区	89	11	168	3725	19	4012
12A区	106	24	82	757	18	987
12B区	3	1	39	283	2	328
12C区	2	0	3	66	0	71
総計	2352	199	804	20512	505	24372

崎遺跡・上浜田遺跡（東海市大田町）の発掘調査で出土した点数を用意した（愛知県埋蔵文化財センター 2014）。

算出した密度（点数 / m²）の高低によって遺跡の4つに分類した。Sは密度1.0以上で、他を圧倒する密度が製塩遺跡の証しである。Aは密度0.1～0.9で、発掘調査の段階から製塩土器の出土が目立つことで注目されてきた遺跡である。Bは密度0.01～0.09でその歴史的評価に製塩土器の多い点が関連づけられてきた遺跡である。Cは0.09以下で、相当丁寧な精査によって1～数点が確認された事例も含まれる。

分類Aの中条遺跡（刈谷市重原本町）や月田遺跡（蒲郡市月田町）は、それぞれ近隣に製塩遺跡がある。中条遺跡については後述するが、月田遺跡では須恵器の円面硯が共伴しており、塩などの海産物の生産や流通の管理に関わっていた可能性がある。寄名山遺跡（西尾市吉良町）は、遺物の時期が9～10世紀で比較的新しい時期の遺跡であるが、三河型土師器甕や清郷型土師器鍋が多量に出土していることから煮沸を伴う生産活動の場であったと考えられる。このように分類Aの遺跡は、製塩を含む生産活動の管理施設の機能を有していた可能性が高い。

分類Bの遺跡にはさまざまな性格の遺跡が含まれる。尾張地域になるが、奈良時代の八王子遺跡（一宮市大和町）は地域の拠点となっており、主屋とみられるL字形に配置された掘立柱建物群の背後（Ab区SD37）でまとまって出土している（樋上 2001）。なお梅坪遺跡も同様であるが、こちらは後で詳述したい。

これに対して千石遺跡（豊田市千石町）は矢作川に面した沖積低地に展開する竪穴建物主体の集落景観であるが、土師質の移動式カマドが多いことや、糸紡ぎの道具である鉄製紡錘車の存在が他の遺跡との異なる。楮山遺跡（岡崎市宇頭町）では、排水溝で連結された竪穴建物群という特異な集落景観ともに宝珠硯などの須恵器の硯11点や官人の装備品である鍔帯金具が出土しており、官衙（東海道鳥取駅家）関連遺跡と目されている（杉浦 2010）。さらに東三河地域（渥美郡）に属する山崎遺跡は、海浜から奥まった立地にあるため製塩に直接携わった場所ではないが、多数の木製の生産用具が出土し

ており、千石遺跡同様に生産活動で一定範囲の地域と交通していた可能性が考えられている（賛 2010）。

このように分類Bの遺跡は一概に定義づけることが難しいが、製塩土器が概ね知多式4類に限定的であることから、比較的短期的なものも含めて多量の製塩土器を保持する機会があったと考えられる。その理由がさまざまで、集落内で必要としたのかあるいは一時的な集荷場であったのかは個別に検討する必要がある。

分類Cの遺跡には、拠点集落遺跡や古代寺院・官衙関連遺跡が含まれる。水入遺跡は後述するとして、高橋遺跡（豊田市高橋町）では大型掘立柱建物を主屋とする建物群、市道遺跡（豊橋市牟呂町）では瓦葺きの古代寺院や倉庫群からなる集落景観が確認されている。しかしながら前者は7世紀末～8世紀初頭、後者も8世紀後半に建物景観の最盛期があり、いずれも知多式（渥美式）製塩土器が多量に流通する時期であるにもかかわらず出土量は少ない。このことから、上位階層の居住する集落に偏った製塩土器を伴う堅塩の流通は認めるとしても、その使用はきわめて一時的で、塩がもつ日常的な食生活に関わるイメージとは相当隔たった用途を想定することになる。この点について、50,000 m²以上の調査面積で数点という寺部遺跡（豊田市寺部町）が象徴的である。当該遺跡では、把手付杯など特殊器形の須恵器との共伴関係から、森氏は出土地点に8世紀後半以降の堅塩を用いた「儀礼」や「祭祀」を想定するが、分類Cの遺跡において、出土状況から堅塩の祭祀用具の側面をどれだけ見出すことができるかが今後のポイントとなるだろう。

3. 水入遺跡における製塩土器

そこで水入遺跡における製塩土器の出土状況について検討してみよう。当該遺跡は、矢作川右岸に面する段丘縁辺に立地する後期旧石器時代～江戸時代の集落遺跡である。断続的な人の営みの歴史で本稿に関わるのは、猿投窯須恵器編年のH-44号窯式期～K-90号窯式期（6世紀末～9世紀）の古代集落である。当該期の集落は7世紀中葉～後葉に遺跡南部（大屋敷地区）

に建物群の増加が進み、7世紀末に集落域が小谷を挟んだ遺跡北部（下糟目A・B地区）に移動するところに大きな画期がある。その後8世紀の集落は同地区で変遷し、8世紀中葉には有力者層の主屋が竪穴建物から掘立柱建物へと変化する。主屋は各時期に1棟ずつであることから、その居住者は集落（村落）の首長の地位にあったとみてよいだろう。

水入遺跡における製塩土器の出土状況は一覧（表3）で示すように、71点のうち13点（約18%）が98D区SB16の埋土から出土している。それ以外は1～数点ずつで各遺構・グリッドに分散しており、一部は中世以降の遺物と共伴しているもので原位置から移動しているものも含まれる。しかし出土の中心は竪穴建物跡に廃棄されたもので（46%）、グリッドごとに表示した出土分布によれば（図2）、7世紀中葉～8世紀中葉の竪穴建物跡の分布と重なりつつ、一方で99D区のような8世紀後葉～9世紀の建物が集中する調査区では数点にとどまる。そのうち1点は知多式2類なので時期的に該当しない。

共伴遺物で注目される出土状況として2点挙げておきたい。まず竪穴建物跡98D区SB28では、NN-32号窯式期（8世紀中葉）の須恵器供膳具や土師器長胴甕の一括廃棄に混じっていることから、当該期の食生活に関わって廃棄された可能性がある。同様に一括性の高いものとして竪穴建物跡98D区SB71もある。次に、首長層居宅の付属施設（厨屋?）と推定される小型竪穴建物跡98D区SB38では、製塩土器の杯部小片と希少な存在の土師器皿が共伴する。さらにSB38を造り替えたと思われる竪穴建物跡98D区SB39からは銚帯金具が出土している。これらの道具は、建物群の主屋となる掘立柱建物98D区SH36・37の居住者が所持したのと考えられ、当該建物群を村落首長または有力者層の居宅（以下、居宅）と評価する根拠となっている（永井2011）。このように、8世紀中葉の水入遺跡の集落内では、比較的上位階層において製塩土器を介して堅塩を入手し食生活に用いていたと推測される。

以上をふまえて、製塩土器が集中する竪穴建物跡98D区SB16について考察する（図3）。SB16と居宅の距離は約20mでこれが近いのか離れているのかは一概に言えないが、出土遺物か

表3 水入遺跡出土の製塩土器（トーン部分はSB16出土）

登録番号	調査区	グリッド	遺構名	層位	Dot No.	部位	分類/時期
2378	98D	VIII 19c	SB01			脚部	知多4類
2394	98D		SB05		58	脚部	知多4類
2436	98D		SB16		141	脚部	知多4類
2437	98D		SB16		152	脚部	知多4類
2438	98D		SB16		166	脚部	知多4類
-	98D		SB16		167	脚部	知多4類
-	98D		SB16		168	脚部	知多4類
2439	98D		SB16		169	脚部	知多4類
-	98D		SB16		170	脚部	知多4類
-	98D		SB16		171	脚部	知多4類
2440	98D		SB16		182	脚部	知多4類
2441	98D		SB16		214	脚部	知多4類
-	98D		SB16		225	脚部	知多4類
2442	98D		SB16		234	脚部	知多4類
2443	98D	IX11c	SB16			脚部	知多4類
2455	98D		SB20		1	脚部	知多4類
2454	98D	IXH2s	SB20			脚部	知多4類
2474	98D	IXI3b	SB26			脚部	知多4類
2473	98D	IXI3b	SB26			脚部	知多4類
2497	98D		SB28		3	脚部	知多4類
2481	98D	IXH4s	SB29			杯部	知多4類
2536	98D		SB37		20	脚部	知多4類
2543	98D	IXI3e	SB38			杯部	知多4類
2636	98D		SB71		1	脚部	知多4類
2692	98D	VIII 11g	SB92			脚部	知多4類
-	98D	IXI6e	SK301			脚部	知多4類
3144	98D	IXI8a	P1677			脚部	知多4類
-	98D	IXH7q	P1917			脚部	知多4類
3145	98D	IXI8a	P2379			脚部	知多4類
-	98D	IXI3e	検I			脚部	知多4類
1438	99A	I G6e	SD01	第2層		脚部	知多2類（篠島IV類）
-	99A	I F10t	SD01	第2層		脚部	知多4類
1440	99A	I F11t	SD01	第4層		脚部	知多4類
1439	99A	I G6d	SD01	第4層		脚部	知多3類?
-	99A	I G9e	SD02			脚部	知多4類
-	99A	I G7h	SD05			脚部	知多4類
2956	99A	I G12i	SK36			脚部	知多4類
1681	99A	I G9d	SX02	礫中		脚部	知多4類
-	99A	I G9d	SX02	礫中		脚部	知多4類
1682	99A	I G10c	SX02	礫中		脚部	知多4類
-	99A	I G10d	SX02	礫中		脚部	知多4類
-	99A	I G11c	SX02	礫中		杯部	知多4類
1683	99A	I G11c	SX02	礫中		脚部	知多4類
2667	99A	I G10d	SX02			杯部	知多4類
2957	99A	I G12e	P1607			脚部	知多4類
-	99A	I G11i	P5167			杯部	知多4類
-	99A	I G12e	P30014			杯部	知多4類
1441	99A	I G8f	トレンチ1			脚部	知多4類
2958	99A	I G12f	検I			脚部	知多4類
-	99A	I G9i	検I			脚部	知多4類
2960	99A	I G11h	検I			脚部	知多4類
2959	99A	I G12c	検I			脚部	知多4類
1591	99B	I G3h	SD01	第4層		脚部	知多4類
1590	99B	xG20k	SD01	第5層		杯部	知多4類
-	99D	IXH16r	SK132			脚部	知多4類
1979	99D	IXH15m	SX01	第4層		脚部	知多2類（篠島IV類）
-	99D	IXH14l	T02			脚部	知多4類
2710	99E	VIII 15c	SB02	テラス		脚部	知多4類
-	99E	VIII 15b	SB02			脚部	知多4類
-	99G	VIII 7m	P1441			杯部	知多4類
-	99I	VIII 3b	SK119			脚部	知多4類
2752	99K	IXJ11	SB1002			杯部	知多4類
-	99K	IXJ6d	SB1045			杯部	知多4類
2821	99K	IXJ7d	SB1046		1161	杯部	知多4類
2822	99K	IXJ7d	SB1046		1161	脚部	知多4類
-	99K	IXJ6b	SB1051		1212	脚部	知多4類
2831	99K	IXJ8c	SB1054			杯部	知多4類
2881	99K	IXJ8a	SB1085			杯部	知多4類
2882	99K	IXJ8a	SB1085			杯部	知多4類
-	99K	IXJ11	SK1392			杯部	知多4類
-	99K	IXI11t	SK1904			杯部	知多4類
3214	99K	IXJ6c	SK2305		1218	脚部	知多4類
1858	98C2	I H2e	SX01	礫直上		脚部	知多3類
1859	98C2	XH20h	SX01	ガケ(2)		脚部	知多3～4類

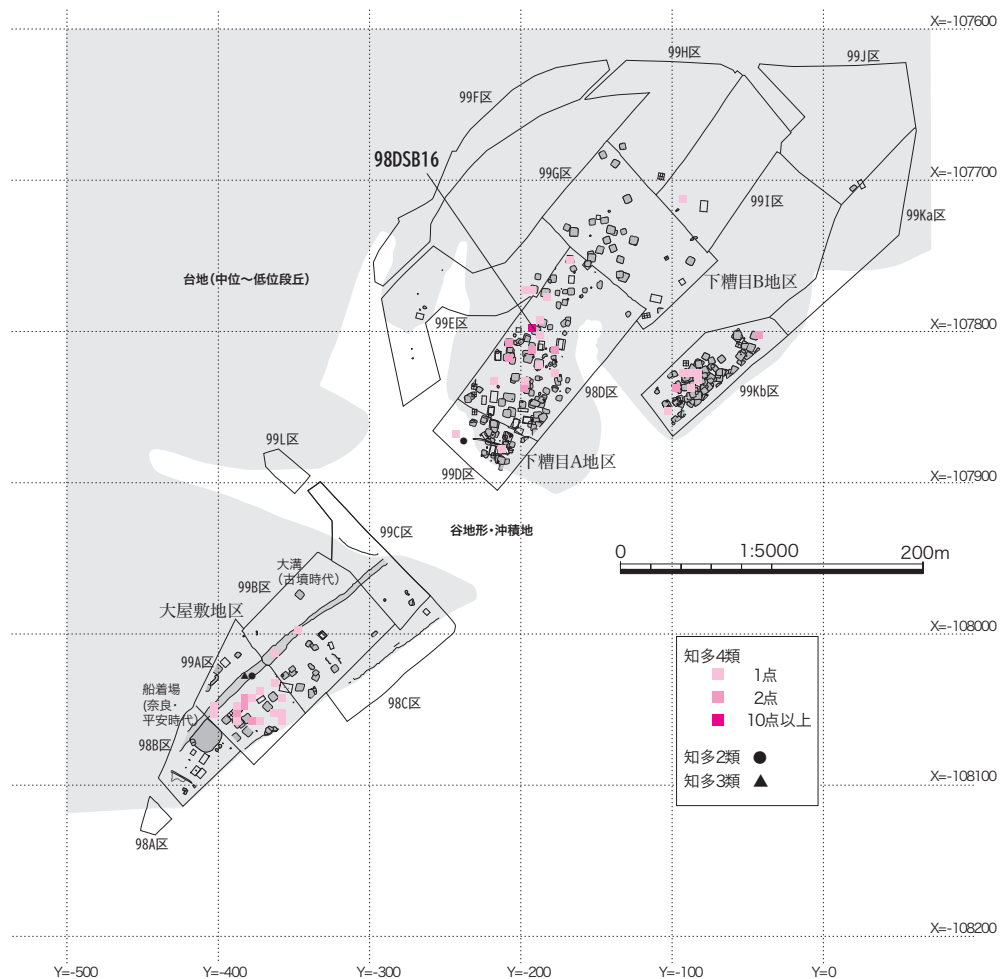


図2 水入遺跡の古代集落における製塩土器の出土分布(愛知県埋蔵文化財センター 2005 をもとに作成)

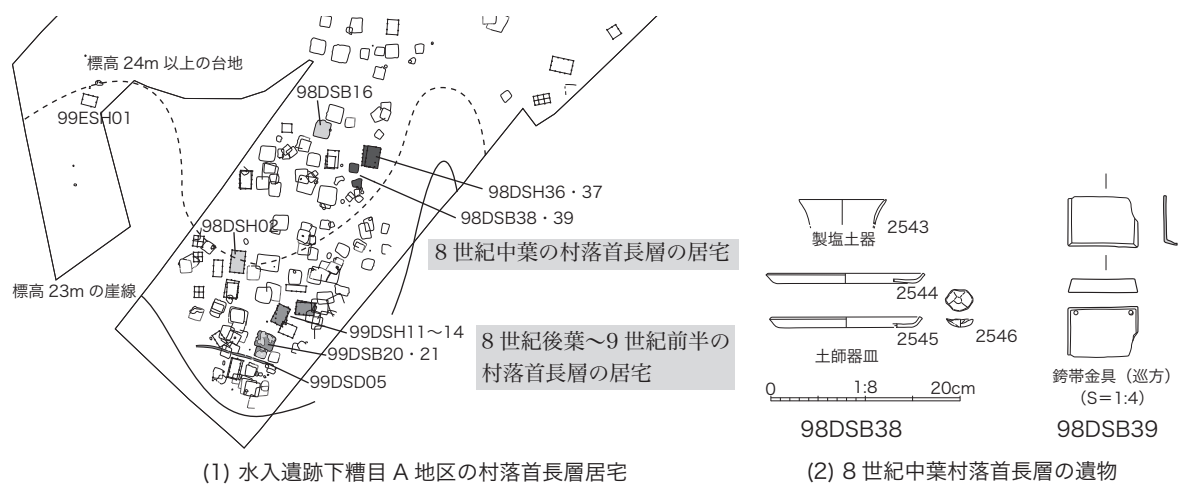


図3 水入遺跡の古代集落における首長層の居宅(永井 2011)

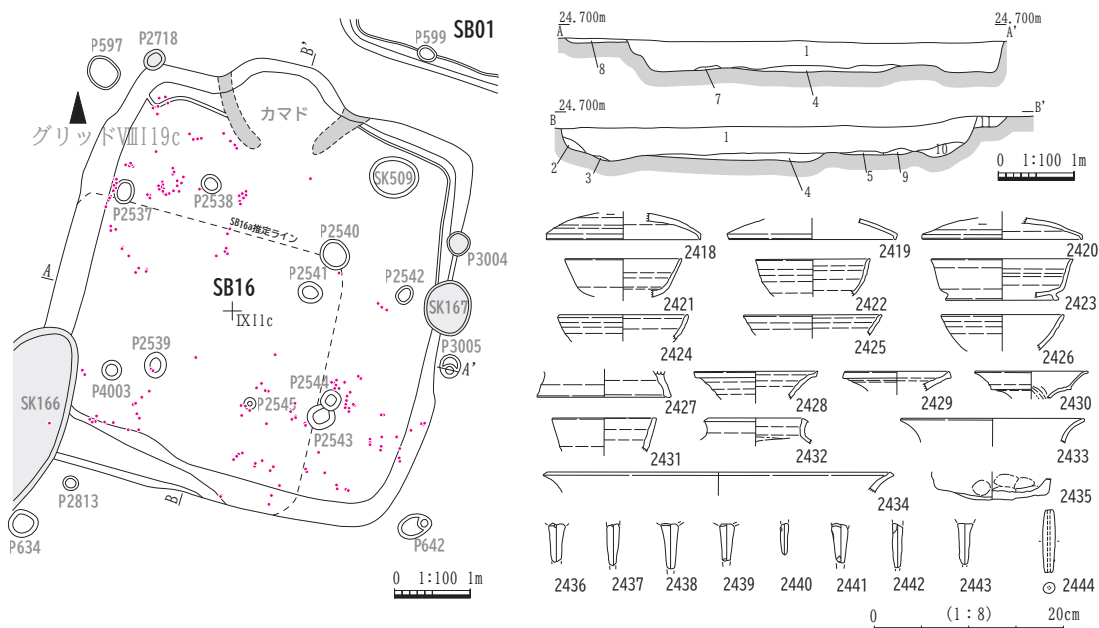


図4 水入遺跡の竪穴建物跡 98D 区 SB16 とその出土遺物（愛知県埋蔵文化財センター 2005 をもとに作成）

ら時間的な併行関係を想定することはできる。SB16 の出土遺物で主体となるのは猿投窯産須恵器の C-2 号窯式期（8 世紀初頭）である（図 4 右）。それらの使用時期を踏まえると、廃絶した竪穴部にそれらが埋められていく時期を 8 世紀前葉と想定するのが妥当である。一方、居宅の時期は付属施設 SB38 の時期に依拠する。当該遺構からは NN-32 号窯式期（8 世紀中葉）の須恵器が出土しているので、その埋没時期は 8 世紀後葉まで下る可能性がある。したがって居宅が機能した時期は 8 世紀中～後葉と推測され、時間的にはややずれがあるように思われる。ただし居宅の創建時期には近い時期と考えられる。

今回、発掘調査時の位置座標記録をもとに、98D 区 SB16 の遺物出土分布を作成した（図 4 左）。それによれば SB16 南東隅と北西隅に分布の集中があり、製塩土器は 1 点（2443）のみがグリッド IX 11c（南東隅）出土でそれ以外は北西隅に集中する。このことから製塩土器の廃棄は北西側からなされたとみられ、南東側の居宅との関係はやや弱くなる。また SB16 の埋土はほぼ単一層（図 4 右上の 1 層）で、土器に完形品がなく小片のみであることから、SB16 の廃絶時に周辺の残滓をかき寄せて短期間で埋め立てた可能性が考えられる。先述のように水入遺跡の下糟目地区では、包含層（遺構検出面より上位）で製塩土器が出土することはほとんどないことから、

SB16 の製塩土器は周辺に散在していたものではなく、埋め立て時にまとめて廃棄されたと考えるのが妥当である。したがって一時的に複数（8 点）の製塩土器がもたらされ、堅塩の入った杯部を分離してからまとめて脚部を捨てたことになる。これに対して SB16 周辺出土の杯部（片）は 2 点のみでまとまりに欠くことから、より広範囲に分散して使われたものと思われる。あるいは集落外へ運ばれた可能性もある。このように水入遺跡における製塩土器の出土状況は、①食生活の場に用意された希少な存在と、②一時的に複数個が搬入された後に離散する流通過程の 2 パターンを示している。

4. 梅坪遺跡における製塩土器

豊田市東梅坪町に所在する梅坪遺跡は、矢作川右岸の段丘延辺に立地する弥生時代後期～室町時代の集落遺跡である。遺跡の所在地は矢作川に北から籠川が合流する地点でもあり、河川交通の拠点としての性格がうかがえる。集落の消長は古墳時代前～中期に洪水が要因と思われる断絶があり、その後 6 世紀末から 9 世紀に集落が継続する。本稿では当該期を古代集落とする。

梅坪遺跡は内陸部における多量の製塩土器出土が注目されたものの、集落域や建物景観の変遷とどのように関係しているのかは明らかでは

なかった。そこで遺構ごとに製塩土器の集計を行い(表4)、出土地点の位置関係を整理してみた。

まず出土遺構の半数が第4次調査の区域で、それ以外も第2・5～7次調査区の区域に限定される点が注目される。出土遺構を点数ごとに色調の濃淡を変えて図示すると(図5)、調査全域(ほぼ集落域に相当)の東半部特に北東部(第4次調査区域)に集中している。さらに出土遺構のいくつかは、例えば竪穴建物跡 SB218・220・221、土坑 SK405・407・408 のように互いに近接しているか重複関係にある。これら近接・重複関係にある土坑群をまとめて扱うと、極端に出土点数多い遺構(10点以上)を中心に、北から①SB218・220・221(33点)、②SK213(14点)、③SK608(17点)をそれぞれ核にする3つの出土分布域に分かれる。

①は点数で他を圧倒しており、加えて包含層ⅧD15bがその上層に該当するようである。SB221は時期不詳であるが、SB218・220はI-17号窯式期に機能しその後埋没したと考えられる。つまり製塩土器はその埋没に伴って廃棄されたと位置づけられる。当該遺構のすぐ西側には総柱構造の掘立柱建物4棟からなる大型建物群があり、集落のみならず地域の首長を担う有力者の居宅と想定されている。建物群の時期は7世紀後葉(I-17号窯式期)に創建され7世紀末まで機能したと考えられるので(永井2016)、製塩土器もその際に集落内へもたらされたものであろう。時間的・空間的にも居宅に結びつけることができる。

②も①と同様に知多式4類に限定される。土坑からの出土でまとめて埋められたものと考えられる。ちょうど掘立柱建物 SB228 の南西隅柱がSK213と重複して掘り込まれる。周辺では竪穴建物跡 SBt410などで製塩土器が複数出土する遺構があり、いずれも8世紀中葉である。当該木の居宅である掘立柱建物跡 SB702 の北東側にあって、そこでの利用に伴って廃棄されたものと考えられる。

③は、知多式3類を含むので①・②よりやや先行する時期である。SK608は、I-17号窯式期の竪穴建物跡 SB620と重複し、その北東部はさらに溝 SD404に掘り込まれており、一部はSD404の出土として計上されている(図6)。

表4 梅坪遺跡の遺構別製塩土器

報告書	出土遺構・層位	知多式				計
		2～3類	3類	3～4類	4類	
梅坪4次	SBt401				1	1
梅坪4次	SBt404				2	2
梅坪4次	SBt404・405				2	2
梅坪4次	SBt406				3	3
梅坪4次	SBt409・SK413				1	1
梅坪4次	SK405	1			3	4
梅坪4次	SK407		2		3	5
梅坪4次	SBt407				4	4
梅坪4次	SK408				3	3
梅坪4次	SD404				1	1
梅坪4次	SK412				1	1
梅坪4次	SK413				2	2
梅坪4次	SBt410				7	7
梅坪4次	SBt411				3	3
梅坪4次	SBt414				3	3
梅坪4次	SK422		2		1	3
梅坪4次	SBt416				3	3
梅坪4次	SBt418				3	3
梅坪4次	SBt420			1		1
梅坪4次	SBt421				2	2
梅坪4次	SBt422				1	1
梅坪4次	SBt205・420				1	1
梅坪4次	SBt208				2	2
梅坪4次	SBt208・420				1	1
梅坪4次	SBt208・423				1	1
梅坪4次	SK416				1	1
梅坪4次	SBt425				1	1
梅坪4次	SBt425・426				1	1
梅坪4次	SBt426				1	1
梅坪4次	ⅧD13g-pit7				1	1
梅坪4次	ⅧD15c-pit1				1	1
梅坪4次	第Ⅰ層		1		3	4
梅坪4次	第Ⅱ層				5	5
梅坪4次	第Ⅲ層		2		2	4
梅坪4次	不明				3	3
梅坪遺跡Ⅱ	SB517				1	1
梅坪遺跡Ⅱ	SB529		渥美C?		1	1
梅坪遺跡Ⅱ	SD201上層		3			3
梅坪遺跡Ⅱ	SD201中層				1	1
梅坪遺跡Ⅱ	SK608		5		12	17
梅坪遺跡Ⅱ	SD404		1		5	6
梅坪遺跡Ⅱ	SD406		1			1
梅坪遺跡Ⅱ	SD603				1	1
梅坪遺跡Ⅱ	SB625				1	1
梅坪遺跡Ⅱ	Ⅲ層				1	1
梅坪遺跡Ⅱ	Ⅲ層				1	1
梅坪遺跡Ⅱ	Ⅱ層			1		1
梅坪遺跡Ⅲ	SB607				3	3
梅坪遺跡Ⅲ	SK721			1		1
梅坪遺跡Ⅲ	SB702				3	3
梅坪遺跡Ⅲ	SB723				1	1
梅坪遺跡Ⅲ	SK723				1	1
梅坪遺跡Ⅲ	SK719			1		1
梅坪遺跡Ⅲ	SB719				1	1
梅坪遺跡Ⅲ	SB734			1		1
梅坪遺跡Ⅲ	SB735				1	1
梅坪遺跡Ⅲ	SB740			1		1
梅坪遺跡Ⅲ	SB746・747			1		1
梅坪遺跡Ⅲ	ⅨC2t-10				1	1
梅坪遺跡Ⅲ	包含層(表土)				1	1
梅坪遺跡Ⅲ	包含層Ⅲ層				1	1
梅坪遺跡Ⅲ	SD201上層			3	3	6
梅坪遺跡Ⅲ	SD201中層				4	4
梅坪遺跡Ⅳ	SB842			1		1
梅坪遺跡Ⅵ	SB224				5	5
梅坪遺跡Ⅵ	SB218				4	4
梅坪遺跡Ⅵ	SB218・220				10	10
梅坪遺跡Ⅵ	SB221				19	19
梅坪遺跡Ⅵ	SB216・233				2	2
梅坪遺跡Ⅵ	SK230				1	1
梅坪遺跡Ⅵ	SK231				2	2
梅坪遺跡Ⅵ	SK226				1	1
梅坪遺跡Ⅵ	SK213				14	14
梅坪遺跡Ⅵ	SB209				2	2
梅坪遺跡Ⅵ	SD204(2次)		1		4	5
梅坪遺跡Ⅵ	ⅧC7g-pit3				1	1
梅坪遺跡Ⅵ	ⅧC9t-pit13		1			1
梅坪遺跡Ⅵ	包含層ⅧD15b				11	11
計		1	20			224

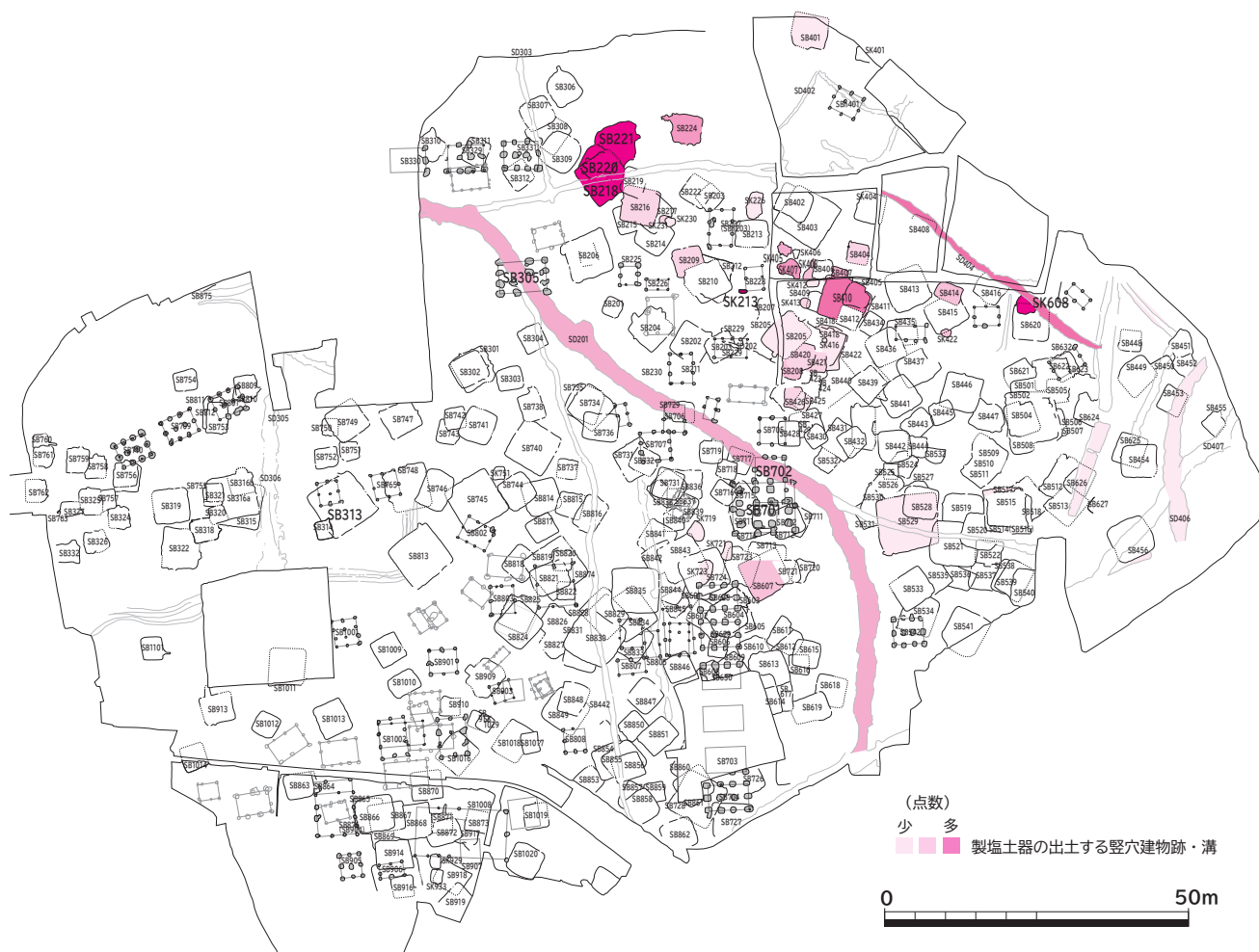


図5 梅坪遺跡の古代集落における製塩土器の出土分布（永井 2016 をもとに作成）

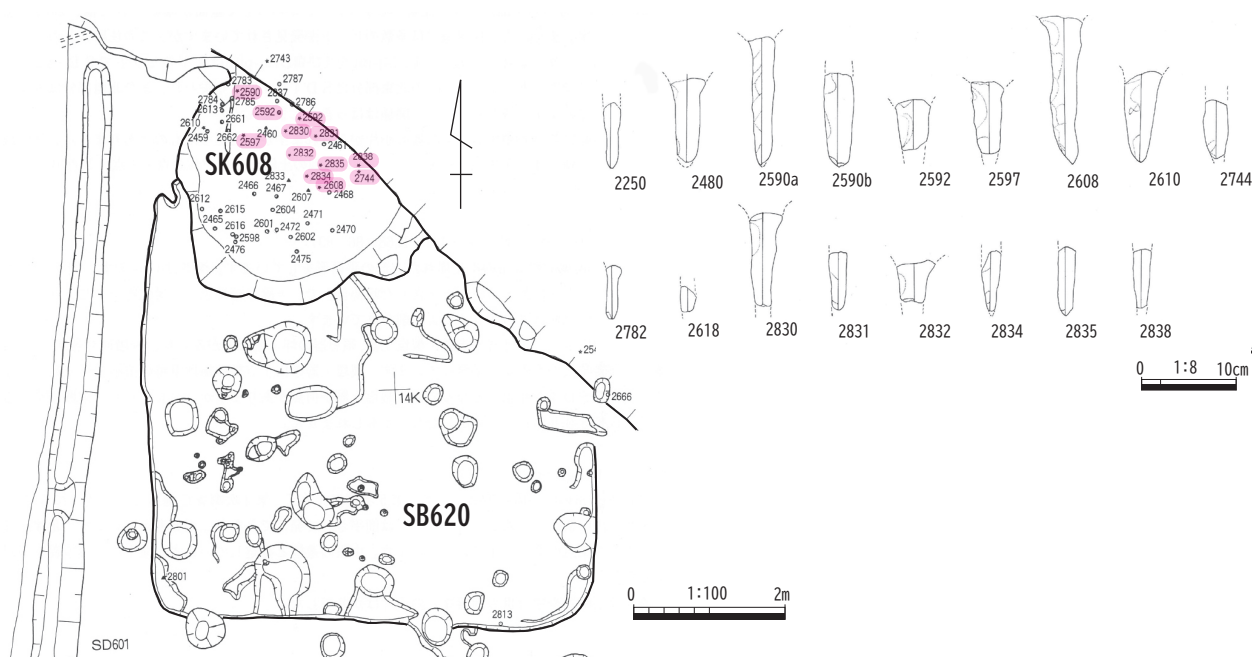


図6 梅坪遺跡土坑 SK608 における製塩土器の出土分布（豊田市教育委員会 1997 をもとに作成）

以上のように、梅坪遺跡では7世紀後葉と8世紀中葉の居宅に伴う製塩土器の廃棄が確認できる一方で、7世紀中葉や同末～8世紀前葉の段階については特定できない。前者は③、後者は①・②に含まれる可能性もあるが、空間的な隔たりがあるように思われる。

5. 小針遺跡における製塩土器

岡崎市北野町に所在する小針遺跡は、矢作川

右岸の段丘縁辺に立地する古墳時代後期～奈良時代の集落遺跡である。集落内の標高約22m以上のやや高地には、上位階層の居宅と推定される大型建物で構成される建物群が存在する。建物跡の分布状況から、集落の最盛期は報告書による時期区分のⅢ・Ⅳ期にあり、特に大型建物群の主屋が竪穴建物跡SI-42・43から掘立柱建物SB-9へと推移する7世紀末～8世紀初頭に上位階層の存在が顕在化する。

小針遺跡では143点の製塩土器が出土してい

表5 小針遺跡における製塩土器の遺構・地点別出土点数

遺構・地点	知多式									計
	1類	1A類	1B類	1C類	2類	2C類	3類	4類	4A類	
A区SI-2								1		1
A区SI-33							3		1	4
A区SI-34								1		1
床面										
A区SI-41					1					1
A区SI-53			1	1		1				3
床面										
A区SI-61							1			1
A区SI-67									1	1
A区SI-69								1	2	3
A区SI-82									1	1
A区SI-85							1			1
A区SI-88										0
A区SI-98.99							1			1
A区SI-100								1		1
A区SI-103								1	2	3
A区SI-111				1						1
A区SI-128		1		1		1				3
A区SI-135			1							1
A区SI-136							1			1
B1区SI-8							1			1
B1区SI-10A								1		1
B1区SI-19							1			1
B1区SI-24							1			1
B2区SI-27								1		1
C区SI-35							2			2
C区SI-37							2	1		3
C区SI-42	1							1		2
～44										
C区SI-42.43							5	9	2	16
C区SI-42								4	1	5
C区SI-43									1	1
C区SI-44							1			1
C区SI-45							1			1
C区SI-47							1			1
C区SI-47							1			1
C区SI-48							1			1
C区SI-48								1		1
C区SI-50							2		1	3
C区SI-70							1			1
C区SI-71A								1		1
C区SI-76								1		1
C区SI-80								2		2
C区SI-82							1			1
C区SI-83							1			1
北壁溝										
C区SI-84								1		1
C区SI-94									2	2
C区SI-95									1	1
C区SI-96A									1	1

遺構・地点	知多式									計
	1類	1A類	1B類	1C類	2類	2C類	3類	4類	4A類	
C区SI-99							1	2		3
C区SI-100									1	1
C区SI-101								1	1	2
C区SI-105								1	1	2
C区SI-110									1	1
B4区SI-117									1	1
B4区SI-116.117								1		1
A区G1-16SK4								1		1
A区H1-23SK2									1	1
A周堀		1					2			3
C周堀							1			1
F6-2				1						1
G1-8					1					1
J1-4							1			1
試掘							1			1
G1-13							1			1
D6-22							1			1
D7-21							1			1
F6-2							1			1
G1-1							1			1
J1-9							3			3
J1-4							2			2
H4-13							1			1
E5-10							1			1
E6-25							1			1
中世溝							1			1
E6-2							1			1
D5-25							1			1
E5-5							1			1
E6-6									1	1
G1-11									1	1
F4-23									1	1
F3-13									1	1
E6-10									1	1
E6-9								1		1
F4-14								1		1
E6-21								1		1
試掘								2		2
G1-23								1		1
E6-5								1		1
E5-14								1		1
F7-1								1		1
F4-11								1		1
中世溝								1		1
F3-13								1		1
E5-4								1		1
E6-9								1		1
E5-24								1		1
SK508								2		2
計	1	2	2	4	2	2	52	51	27	143

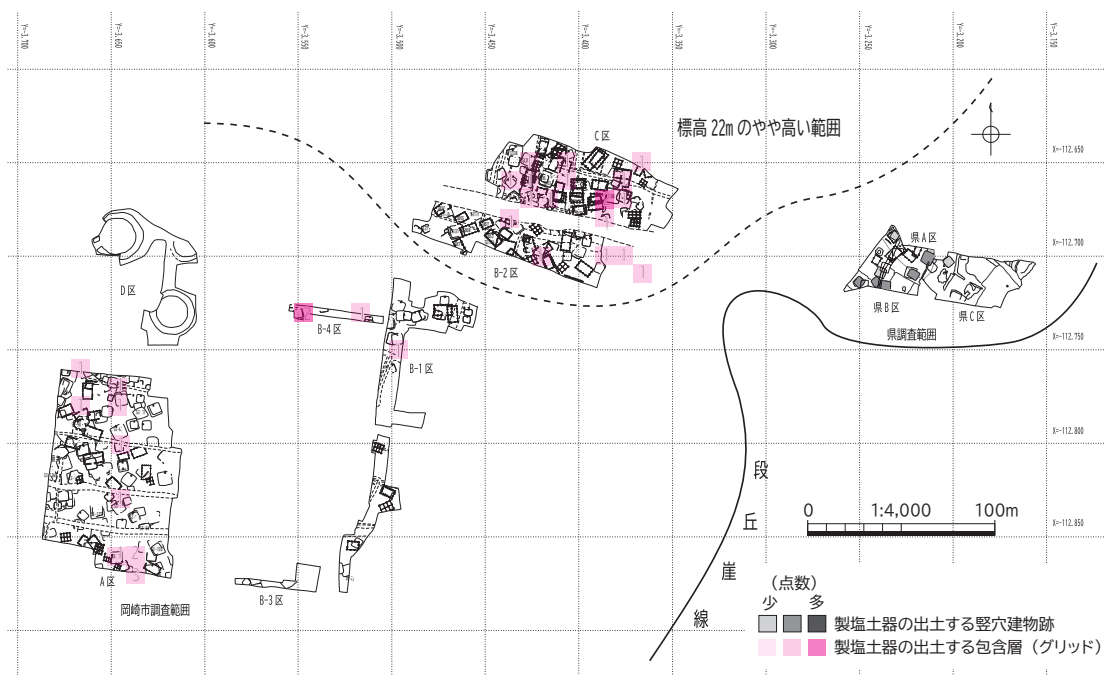


図 7 小針遺跡の古墳時代から古代の集落における製塩土器の出土分布（永井 2011 をもとに作成）

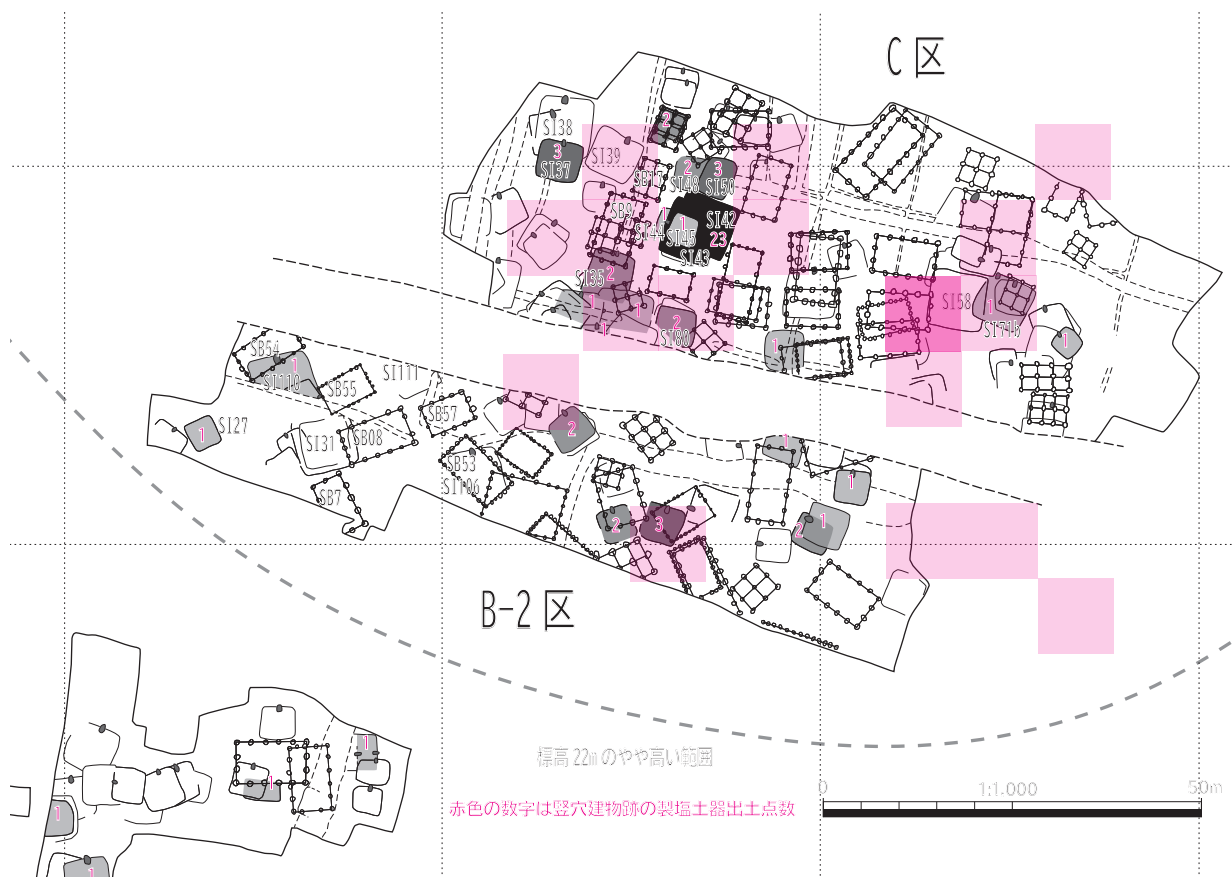


図 8 小針遺跡の首長・有力者層の居宅とその周辺における製塩土器の出土分布（永井 2011 をもとに作成）

る。類型別では知多式3類が52点、同4点が78点でそのほとんどを占めている。これは先述した集落の最盛期に相当する。

出土分布は①竪穴建物跡・土坑出土のもの、②グリッド単位で取り上げた遺構面出土のものに区分してみる(図7・8、①を黒色系、②を赤色系、濃淡で量の多少を表示)。建物跡が密集するA区やB-2区、C区に分布する一方で、建物跡の少ないB-1区や県埋文センター調査区などでは疎らになる。先述のようにC区には圧倒的な数量の製塩土器が出土した大型竪穴建物跡SI-42・43があるが、遺構面における出土傾向はその位置とは同一ではない。以上から②の出土分布は、本来廃棄された場所から後世の耕作などにより拡散しているとみた方がよい。

よって①を中心に評価すると、A・B-1区での使用状況は特定しにくい、C区では居宅SB-9での使用から廃棄(SI-42・43)が顕著となる。一方その周辺の竪穴建物跡からも少数ずつが出土しているが、それぞれの居住者が使用・廃棄したとみるか、居宅からの廃棄場所とされたのか見方が分かれる。しかしいずれにせよ圧倒的な存在(居宅)に対して従属的な存在であることには変わらず、その視点に立てば、B-2・C区で製塩土器の出土する約80m四方は居宅の居住者の占有度が高い空間と考えることもできるだろう。また知多式3類が全体の約3割を占め、さらに同1・2類も含まれている点は梅坪遺跡に先行して製塩土器(堅塩)を入手できる立場であったことも示している。

6. 中条遺跡における製塩土器

刈谷市重原本町に所在する中条遺跡は、矢作川流域ではなく、その西側にある猿渡川流域に属し、猿渡川と薬師川に挟まれた幅約500mの半島状の段丘面に立地する。縄文時代中期の集落や貝塚を含むことで知られ(中条貝塚)、一方で中世の荘園(重原荘)の中心的施設として区画溝を伴う中世集落遺跡でもある。本稿に關係する古代集落は、7世紀中葉に始まり9世紀後半まで継続する。大型建物を主屋とする建物群が確認され、それは8世紀後葉に竪穴建物から掘立柱建物へと推移したと考えられる(永井

2022)。中条遺跡の発掘調査では他の集落遺跡と比べて圧倒的に多い製塩土器が出土していることで注目されており、ここではその出土分布を大型建物との関係でみておきたい。

小針遺跡と同じ検討方法で、まず①竪穴建物跡出土のもの、②遺構面出土のものに分けて分布状況を見る(図9、表示方法は図7・8と同じ)。建物遺構は調査区の南～西部に集中しており、竪穴建物跡からの製塩土器の出土分布は調査区南東部でも比較的多数あるのに対し、当該地点の遺構面での出土は少ない。ところが調査区南西部の大型竪穴建物跡(H09-SI01)とその付近で集中的に出土している。これは初年度(平成9年度)の発掘調査で遺構の埋土と包含層が不明だったためで、その後は比較的遺構に伴って取り上げられたと思われる。したがって中条遺跡においても①を中心に検討するのがよい。

次に、竪穴建物跡以外の土坑やピット(柱穴を含む)からの出土状況も把握してみよう。ただし報告書では土坑やピットの遺構番号は全て表示されていないのと、先述のように中世の遺

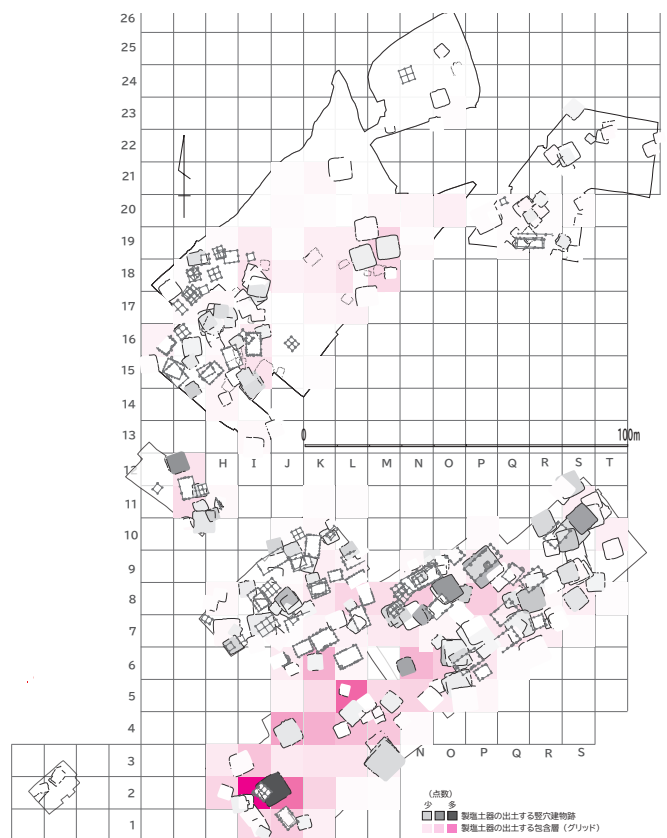


図9 中条遺跡の古代集落における製塩土器の出土分布
(永井 2022 をもとに作成)

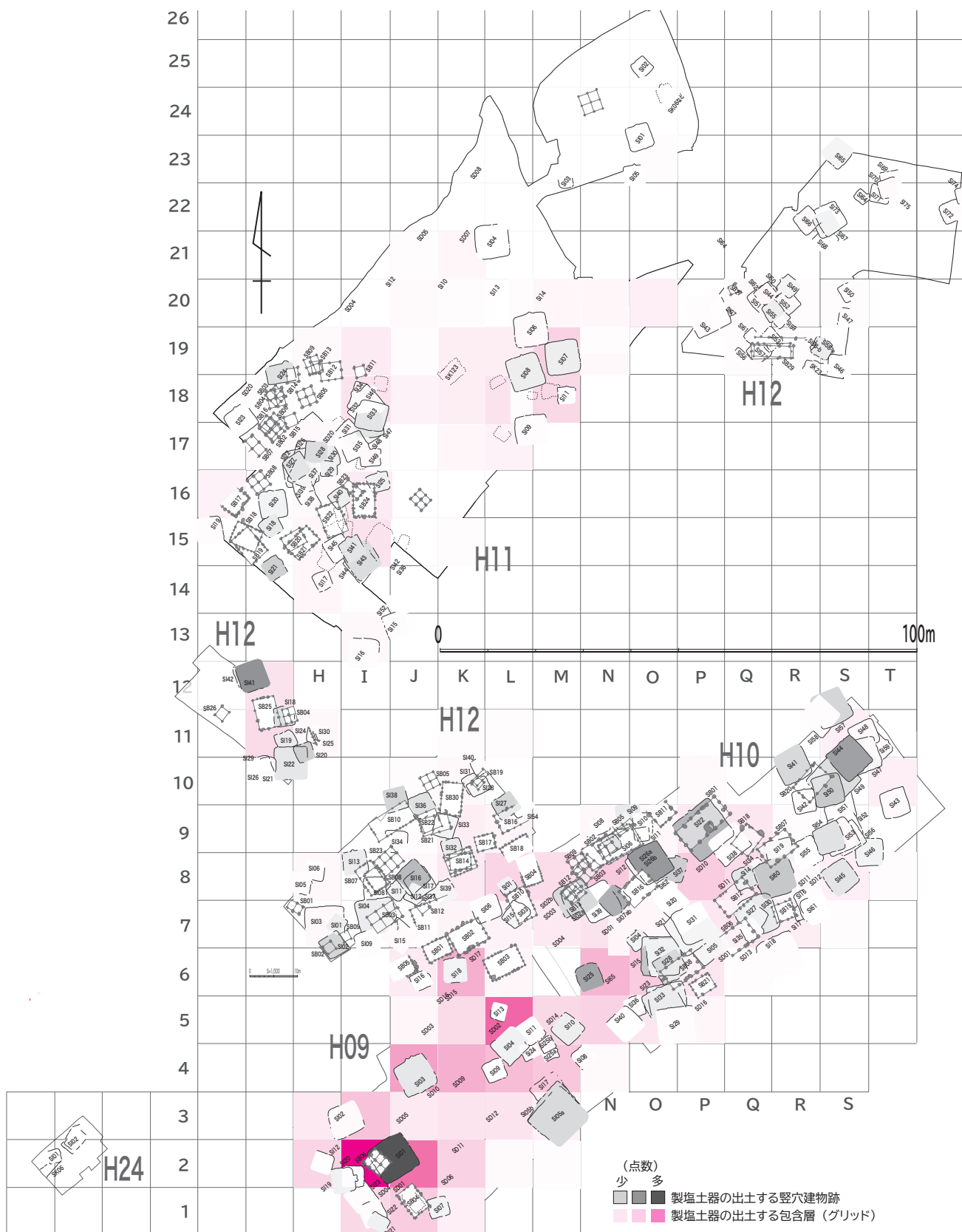


図 10 中条遺跡の古代集落における製塩土器の出土分布（永井 2022 をもとに作成）

構である可能性もあるため、ひとまずピットのみを扱いグリッド単位での表示を行う（図10、表示方法は図7・8と同じ）。

こうしてみるといくつかの興味深い点が指摘できる。まず、比較的多量の製塩土器が出土する竪穴建物跡はH10（平成10年度）を中心にH09・12の調査区に分散している。集落内で最大規模の大型竪穴建物跡H10-SI22とその造り替えとみられる大型掘立柱建物跡H10-SB01は、首長層または有力者層の居宅と考えられ、前者で33点が出土しているが、その南西隣のSI26(26a・b)で48点とそれを上回る。さらに離れた地点のSI25で42点、SI44で44点が計上されている。これらの竪穴建物跡は主に7世紀後半に機能していたものである。特段規模が大きいわけではないので、小針遺跡での評価を援用すれば、居宅に従属的な空間や施設に含まれていた可能性が考えられる。

これは建物群の消長からみた空間の占有状況にもあらわれている。すなわち8世紀中葉～後葉の段階で大型建物（主屋）を含む「口」または「コ」字形の建物配置が存在し、その範囲は

約50m四方となっている。しかも大型建物が併行して存在しているのだが、それらは明確な規則的配置とはならない（図11）。このことから居宅の居住者が他を圧倒していたことが推測され、例えば南西隅にある大型竪穴建物跡H09-SI01は製塩土器81点が出土しているものの、それは集落の中心とは即断することはできない。むしろ先述したように、中条遺跡のような分類Aの遺跡は製塩遺跡と他の消費地との中継地の性格が強く、その流通に関わる施設が存在したものと推測できる。

また8世紀中葉～後葉の段階は、標準～小型の竪穴建物跡が調査区の北側に分布しているが、そこからの製塩土器の出土点数は少ない。ピットからの出土もほぼこの状況に近く（図10）、製塩土器が多量に搬入される環境にありながら、集落内では首長・有力者層向けやその管理下にあると思われる流通用として独占された状況を見ることができる。こうしてより堅塩の商品価値が高まるにつれて、7世紀後葉～8世紀前葉にみられた地元の食生活への堅塩の浸透は閉ざされいったと推測される。

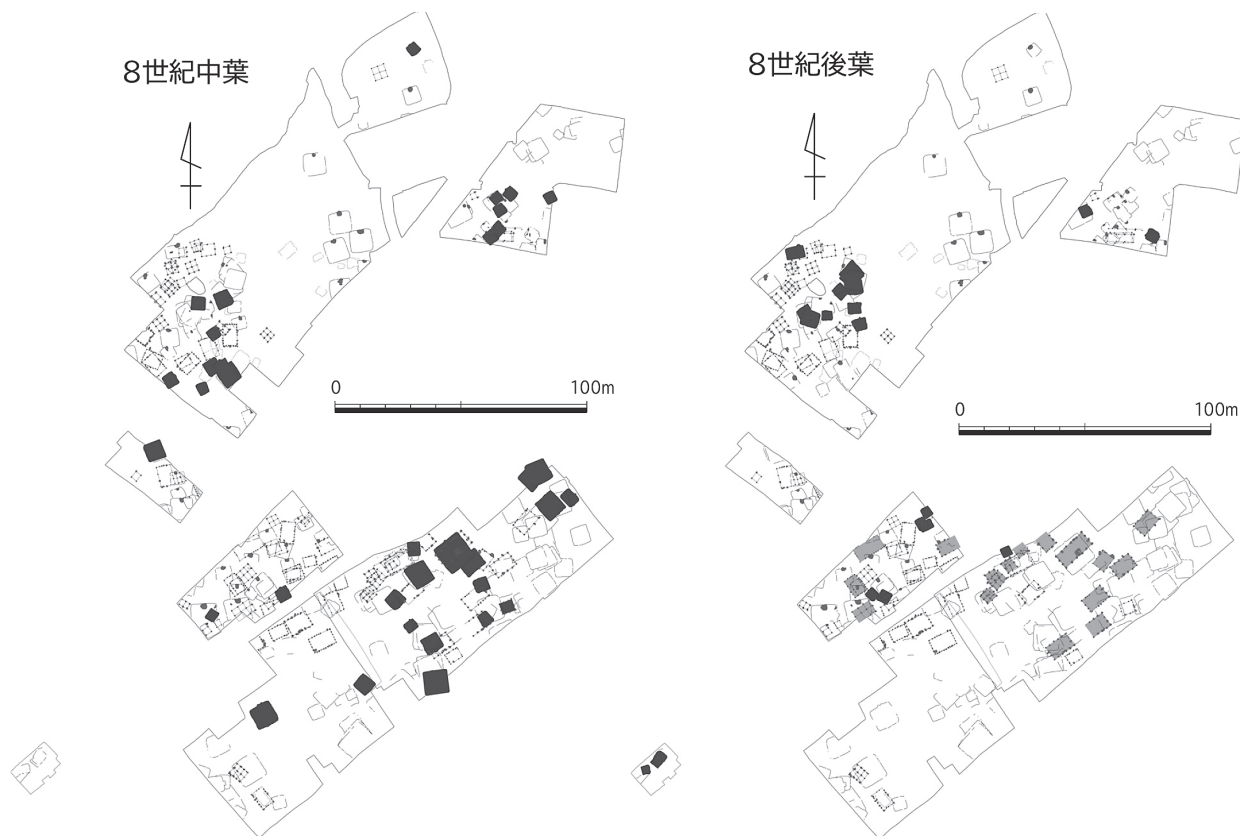


図11 中条遺跡における8世紀中葉から後葉の建物変遷（永井2022）

しかしながら中条遺跡の居宅は9世紀以降は継続せず、平安時代前～中期には集落自体も衰退する。集落が移転して別の場所で継続した可能性もあるが、新たな主体が堅塩の流通を差配するようになったとも考えられる。

7. まとめにかえて - 掘立柱建物と製塩土器 -

以上のように、8世紀中葉～後葉に製塩土器（堅塩）に関わる生産地周辺の状況は変貌した。それに関連する事象として、冒頭に述べた掘立柱建物の柱穴から出土する製塩土器の評価について検討したい。

岐阜県関市に所在する大杉西遺跡は、長良川に沿った台地上に立地する集落遺跡である。古代寺院跡である大杉廃寺跡をとりまくようにして掘立柱建物跡や竪穴建物跡が多数確認されている。その大半は一般的な規模であるが、第10次調査では2間×5間の側柱で構成される掘立柱建物跡1基のほぼ全形（柱穴14基中12基）が確認されている（図12）。柱穴全てで柱痕跡が1つつつ接地面（いわゆるアタリ）として確認されており、建て替えがないことが明らかである。出土遺物のうち須恵器は8世紀中葉とさ

れ、建物の創建時期とされている（関市2023）。

注目されるのは2基の柱穴から1点ずつ出土した製塩土器の脚部である。柱穴SK14では不明だが、同SK16では掘方の埋土から出土している。すなわち立柱の際に穴に入り込んだものである。これだけならば地表面の残滓が紛れたと思えるが、当該遺跡の発掘調査では包含層から製塩土器が出土していない。つまり柱掘方の近くに存在した希少な製塩土器がその埋土に入れ込まれた意図的な状況を想定すべきなのである。

大杉西遺跡と同一の例は西三河地域にも存在する。梅坪遺跡の掘立柱建物SB702は、7世紀末～8世紀初頭の四面廂で総柱構造の掘立柱建物SB701を建て替えたもので、3間×4間の側柱構造ながら柱穴の底に礎板となる扁平な礫が据えられている。つまりSB702はSB701に見合う規模の建物で、首長・有力者層居宅の主屋に相当するが、その柱穴からも製塩土器の脚部が出土している（図13）。先述のように梅坪遺跡における製塩土器の出土状況は大半が竪穴建物跡で、柱穴を含むピットからの出土は少ない。にも関わらず、居宅の主屋に関わって製塩土器が出土することは、建物の建築にあたって意図的に入れ込まれたものとみるべきだろう。

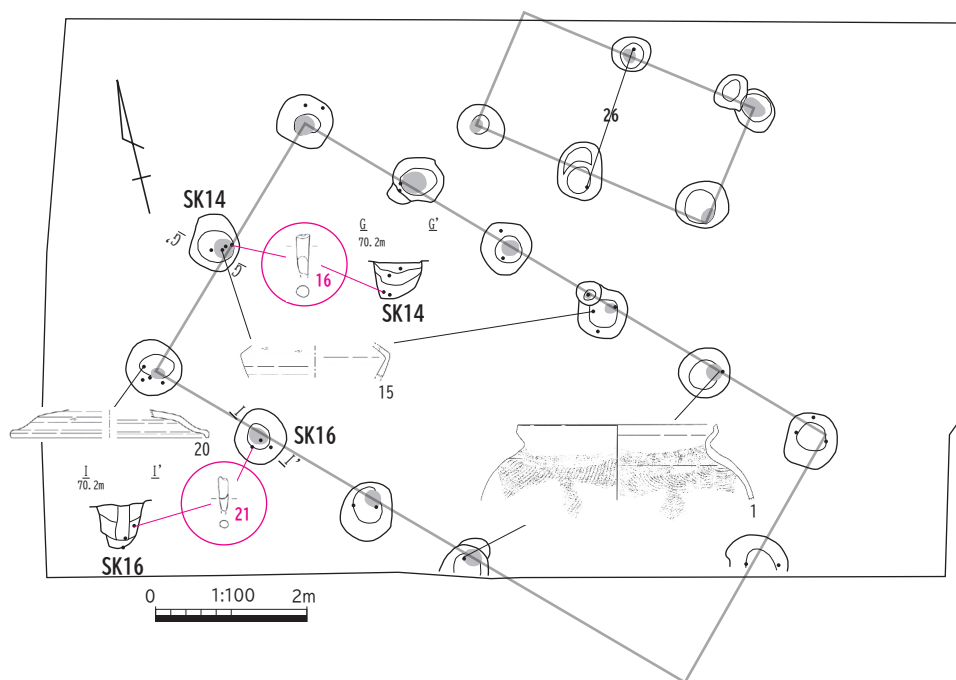


図12 大杉西遺跡の掘立柱建物跡1と柱穴の出土遺物

最後に中条遺跡の大型掘立柱建物 H10-SB01 の例である。中条遺跡における古代の掘立柱建物の柱穴から出土した製塩土器はわずかである(表6)。しかもその半数以上が8世紀中葉以降に限定される。

これらの柱穴から出土する製塩土器は、掘立柱建物の建築に際して間近に準備されていたものと考えられる。その用途として、現代も土地の清浄を保つための「盛り塩」の慣習があるが、その行為の痕跡と推測される。このように8世

紀中葉～後葉に「堅塩」の祭祀への使用が始まると、食生活への使用は反比例して減少へと転じたものと考えられる。

中条遺跡における製塩土器の出土状況については、河野あすか氏(刈谷市歴史博物館)にご教示いただいた。記して感謝申し上げたい。

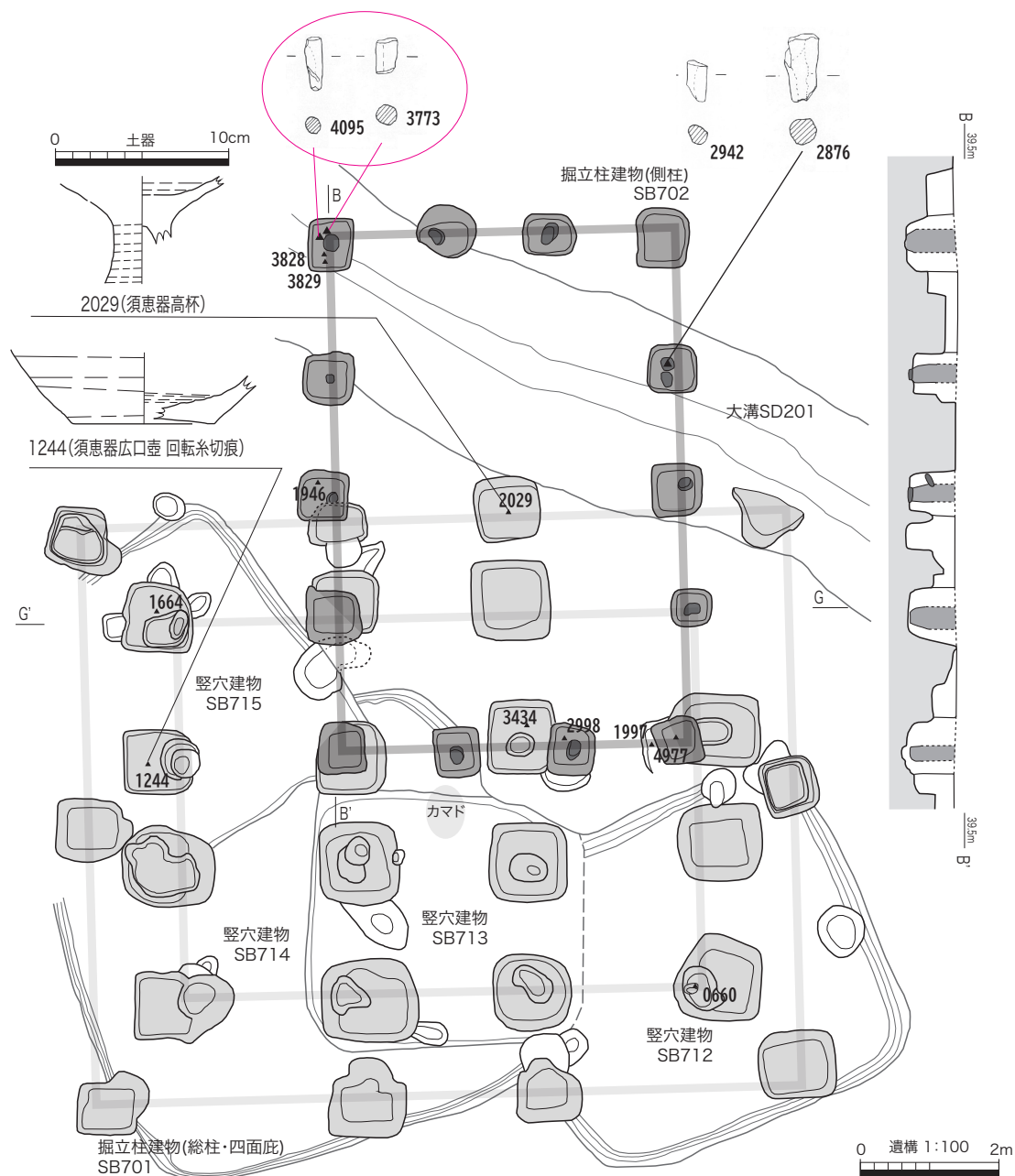


図13 梅坪遺跡の掘立柱建物跡 SB701・702と柱穴の出土遺物

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター 2001 『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 92 集
愛知県埋蔵文化財センター 2005 『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 108 集
愛知県埋蔵文化財センター 2014 『松崎遺跡Ⅱ 上浜田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集
刈谷市 2017 『中条遺跡発掘調査報告書 平成 9 年度』
杉浦裕幸 2010 「楮山遺跡」『愛知県史 資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』愛知県
関市 2020 『関市市内遺跡発掘調査報告書 平成 29 年度』
豊田市教育委員会 1995 『梅坪遺跡Ⅱ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 2 集
豊田市教育委員会 1999 『梅坪遺跡Ⅵ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 集
永井邦仁 2011 「碧海台地東縁の古代集落」『研究紀要』第 11 号 愛知県埋蔵文化財センター
永井邦仁 2016 「梅坪遺跡における古代集落の再検討」『豊田市史研究』第 7 号 豊田市
永井邦仁 2022 「参河国賀茂郡・碧海郡における古代集落の構造と変遷」『古代集落の構造と変遷 2』第 25 回古代官衙集落研究会報告書 奈良文化財研究所
森泰通 1997 「東海地方における消費地出土の製塩土器 - 特に固形塩の問題をめぐって - 」『シンポジウム製塩土器の諸問題 - 古代における塩の生産と流通 -』塩の会シンポジウム実行委員会
森泰通 2020 「第Ⅴ章 総括 第 2 節 製塩土器」『寺部遺跡Ⅺ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 84 集

表 6 中条遺跡の掘立柱建物跡（柱穴）出土の製塩土器

年度	遺構番号	長軸 (桁行、m)	短軸 (梁行、m)	方位	遺物	遺構時期	備考
H10	SB01	11.3	5.0	N-48°-E	須恵器無台杯 I-17, 製塩土器	8 世紀中葉～	※時期は遺構重複関係から
	SB03	4.8	3.8	N-40°-E	須恵器壺, 甕, 平瓶, 製塩土器	8 世紀前葉～	※時期は遺構重複関係から
	SB09	3.4	3.2	N-60°-E	須恵器蓋小片, 製塩土器	8 世紀前葉～	※時期は遺構重複関係から
	SB16	6.8	4.7	N-47°-E	灰釉陶器碗 O-53 → 混入?, 製塩土器	8 世紀中葉～	※時期は遺構重複関係から
	SB21	4.5	3.3	N-60°-E	須恵器, 灰釉陶器, 土師器, 土鍾	8 世紀中葉～	柱列に若干振れあり※時期は遺構重複関係から
H12	SB01	3.0	1.8	N-59°-W	製塩土器 (知多 4 類, 図なし, 同柱穴から杯部も出土)	不明	
	SB03	6.4	4.1	N-56°-E	製塩土器, 須恵器, 土師器小片	不明	
	SB07	6.3	4.1	N-35°-W	須恵器蓋, 無台杯, 土師器小片, 製塩土器 (知多 4B 類脚部)	8 世紀中葉	SB08 との新旧不明だが方位・形状は類似
	SB09	2.0	1.8	N-26°-W	須恵器無台杯, 高杯, 土師器小片, 製塩土器 (知多 4 類脚部)	不明	
	SB18	6.3	1.7 以上	N-60°-E	須恵器甕, 杯身, 土師器小片, 製塩土器 (知多 3B, 4B 脚部)	不明	

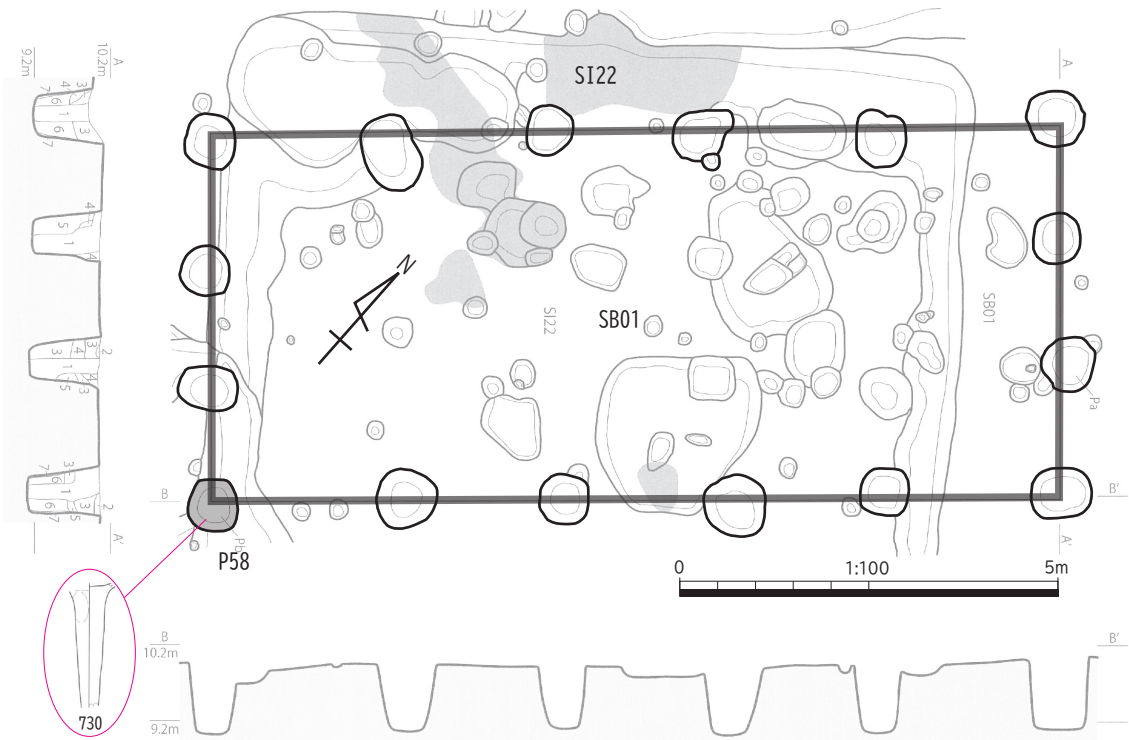


図 14 中条遺跡の掘立柱建物跡 H10 年度 SH22 と柱穴の出土遺物 (刈谷市 2017 をもとに作成)